

早稲田大学 法学部 世界史 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	09年度の選択問題は37題だったが、今年は一昨年までと同じ34題に戻った。論述1題は不変。論述のテーマは昨年・一昨年に引き続き近現代史。正誤判定は昨年と同レベルだが、論述は大幅に軟化した。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	前近代中国の支配体制と儒学	第一問の中国史は例年通りの設定。昨年は正誤判定の一部に悩ましい部分があったが、今年は基礎的学力で対応可能なものばかりであった。設問1のハは「契約関係」に注目すれば解決。設問2のニは蘇秦・張儀の合従・連衡が逆転している。設問3のエは楽勝のはず。設問4のイの御史大夫は司法ではなく官吏の監察が業務。設問5のロは景帝時代の出来事。設問6のロは白居易ではなく韓愈が正しい。	標準
II	東西文化交流	昨年は東南アジア史だったが、今年は東西交渉史。早稲田では以前難問が続出した分野だが、この問題はやさしい。設問1の④のウイグル文字はアラム系文字。設問2の③のタラス河畔の戦いはアッバース朝が正しい。設問3の③のアヘン公認は北京条約(1860)の内容。設問4の①は法隆寺ではなく東大寺。設問5から設問9は瞬間正答をきめたい。	易
III	西洋中世の英・仏・独	設問1の4の西ゴート王国を滅ぼしたのはウマイヤ朝。設問2の3はアーサーではなくアルフレッドが正しい。設問3は一見ややこしそうだが、アナーニ事件の顛末からボニファティウス8世の次ぎはクレメンス5世と気づけば即正解できる。設問4の3・設問6の4・設問7の3はいずれも君主名の何世の部分の数字違いである(シャルル8世ではなく7世のように)。	易
IV	近現代フランスにおける宗教と国家	今年の問題の中では際立って難しい。設問2のbの十分の一税は「封建的特権の廃止宣言」で無償廃止させている。設問3のcのコンコルダートでは教会財産は返還していない。設問4のbは気の抜けたような文章。大問IIIの設問5の4でヴァロワ朝初代のフィリップ4世をカペー朝最後の王としているのと比べると、本来は何か王朝名があったのではないかと疑われる。設問6は知識で答えるのではなく常識で類推する。cの「友愛」は鳩山首相に対する皮肉をこめて示されているのかもしれない。世俗化に関しては近年、イスラーム教徒の学生の宗教的意味合いを持った服装を禁止する措置としても注目されている。設問8の政教分離法の具体的内容は非常に難問。bの宗教に対する国家援助はいかなる場合でも禁止されている。	難

番号	出題内容	コメント	難易度
V	南北戦争当時の南北対立	昨年の「北アフリカの仏植民地」に比べるとかなり書きやすいテーマである。なによりも教科書の本文に必ず書かれている文脈なので、教科書が頭に入っている人はそのまま思い出せば完答できる。書きやすいテーマだけに失敗は許されない。要領を得た読みやすい文章にまとめる必要がある。	易

〔総合コメント〕

例年のことながら正誤判定問題が難しい。ただ個々の問題文を見ていくと、「誤った」部分は意外に簡単に見つかる。困るのはそれ以外の正しい文章の内容である。見覚えのないような内容が多く、もしここに間違いがあったらと疑いだしたらきりがなくなってしまうのである。正論から言えばほめられたことではないが、「間違い」が見つかったらあとはあまり気にしないほうがいい(来年から「間違いをふくむものを全て選びなさい」となったら話は別だが)。そして、「誤った」部分をいち早く見つけ出すにはそれなりの訓練が必要である。それには、一定レベル以上の正誤判定問題の数をこなすことをおすすめする。「誤った」部分に関してのみ言えば基本的内容が多いので、基礎力+慣れ=高得点が勝利の公式といえよう。法学部定番の論述問題、一昨年のテーマは「米の世界恐慌対策」、昨年はアフリカ諸国のかかえる複雑な問題の歴史的背景であった。今年は再び米国史がとりあげられた。今年のテーマは教科書的なので一通り書くのはそう難しいことではない。しかしここは欲を出し、南北戦争を奴隷制の是非・人権問題・民主主義といったどちらかという善悪の視点から捉えるのではなく、問題の本質が産業革命に起因する世界規模の経済構造の変化であり、それによって誘発された貿易政策をめぐる対立だったことを強調する文章をつくりたい。テーマがありふれている場合、論述の出来は視点と論旨を明快にできるかどうかで大きな差がでる。普段からそうした文章をつくる訓練をつんでおきたい。